

# 共同体のゆくえ

——トニ・モリスン『スーラ』と『パラダイス』をめぐって——

太田 まり子

## 共同体のゆくえ

——トニ・モリスン『スーラ』と『パラダイス』をめぐって——

太田 まり子

はじめに

トニ・モリスン(1931～ )は、第1作『青い眼がほしい』(1970年)から最新作『パラダイス』(1998年)まで、合計7つの小説を世に出している。そのどの小説においても、黒人の共同体が登場し、作品中で重要な役割を果たしている。その中でも第2作『スーラ』(1973年)と『パラダイス』に描かれた共同体は、類似点が多い。二つの共同体はともに危機に瀕していて、また魔女呼ばわりされる女がいる。そして、魔女と決めつけられた女と共同体の人びととの関係が、共同体のゆくえに作用する点でも共通性がある。しかし共同体のあり様も、魔女と呼ばれる女も、その両者の関係も、そして共同体のゆくえも、類似しながらも同じではない。その類似と相違を見ていくことで、モリスンの共同体観の変化と到達点を明らかにすることができると思う。この小論の目的はそこにある。

モリスンの小説には、読む者を引きつけ感動を呼びおこすストーリー性があり、それが詩的にして豊かな言葉によって描かれている。また、そこには政治的・社会的・宗教的・倫理的な要素などが多層的に含まれている。この小論は、そうした要素が渾然一体となって成り立っているモリスンの小説のうち、『スーラ』と『パラダイス』にみられる共同体観の比較を行おうとするものである。

では、『スーラ』と『パラダイス』に描かれた共同体と「魔女」、そして両者の関係を見ていこう。

### 1 二つの共同体

#### (1) 『スーラ』のボトム

『スーラ』の冒頭では、語り手がオハイオ州のかつての小さな黒人集落

ボトムを回想している。回想の中のボトム、つまり1920年頃のボトムでは、厳しい自然環境の中で住民たちが肩を寄せあって暮らしていた。この集落でスーラとネルという二人の少女は生まれ育ち、友情を育み、やがて気持ちが離ればなれになる。この小説の最後(1965年)では、初老の年齢になったネルがボトムの変貌ぶりを嘆いている。かつてのボトムを懐かしく思い出し、今は亡きスーラの死を悲しむ場面で、この小説は終わる。少女たちもボトムも、時代の流れの中で大きく変わった。

40年余りの間に、この集落に何が起こったのか。かつて貧しかった黒人たちは、多少豊かになると、冬の寒さの厳しい丘の上のボトムを去り、白人たちの住む谷間に近い場所に引っ越した。ボトムに残った黒人たちの生活も変わった。テレビと電話を各戸が持つようになり、住民たちが互いに訪ね合うことも稀になった。老人ホームが建てられ、老人はそこに入れられる。また白人たちが好んで丘の上に引っ越して来るようになり、土地の値段が上がった。住む者のいない家々が壊され、白人向けのゴルフコースの建設が進んでいる。

大衆社会と消費文化の波が、ボトムという辺境の集落にも押し寄せ、黒人の共同体は消えようとしている。<sup>(註1)</sup>

スーラを魔女と見なして警戒し、団結していた住民たちは、スーラの病死のあと、警戒心を一気にゆるめた。そして、寒気のゆるんだ日にお祭り騒ぎをして、建設途中のトンネルに深入りしたために、大勢の住民が亡くなるという事故が起こった。この事故が、この共同体崩壊の最初のきざしであった。

魔女と見なされる女の存在と共同体の関係、そして大衆社会と消費文化の到来による共同体の崩壊という『スーラ』の物語のモチーフは、『パラダイス』に引き継がれ、深められている。

## (2)『パラダイス』のルーヴィ

『パラダイス』はオクラホマ州の黒人の町ルーヴィの男たちが、郊外にある修道院を襲撃する場面で始まる。<sup>(註2)</sup>1976年のことだ。ルーヴィの歴史はその90年近く前にさかのぼる。解放奴隷の9家族が、入植者募集の新聞記事に導かれて、ルイジアナとミシシッピからオクラホマへと旅をした。しかし、極度に貧しいなりをした一行は、白人の町からも、すでに定住していたやや肌の色の薄い黒人たちからも拒否されて、旅の荷をほど

くことができず、苦難の旅を続ける。インディアンの土地を通りかかった時、一行のリーダーであるビッグ・パパことゼカライア（ヘブライ語で「神は覚えておられた」の意）が啓示を受けて、その地に定住することになった。何年も荒地と苦闘した後に、そこがヘイヴン（隠れ場という意味）と呼ばれる町となり、やがて人びとはオクラホマのさらに奥地に町を移して、ルーヴィを建設したのだった。人びとは先祖の屈辱と苦難の体験を記憶し、緊密な相互扶助の関係を保って暮らしてきた。

しだいに、住民の暮らしは豊かになった。小麦や牛肉で現金収入を得、天然ガスが出てその権利も売れた。洗濯機やトラクターが人びとをつらい労働から解放した。しかし、人びとの気持ちはバラバラになり始めた。1970年頃には、ビッグ・パパの孫の世代がルーヴィの指導者的立場になっている。この町でも他の町や都会へと去る者があとを絶たず、残った者も古い世代には理解できない行動をとる。指導者たちは、若い者をそそのかし町を墮落させているのは、町はずれにある修道院の女たちだと考えている。町の男たちから現代の魔女と見なされた修道院の女たちは、男たちの銃に撃たれて倒れる。

## 2 記憶の中の共同体

『スーラ』のボトムと『パラダイス』のルーヴィはともに、白人の社会から排除、拒否され、厳しい自然条件の場所に追いやられた黒人たちが作った共同体だ。そして『スーラ』の小説が終わる1965年頃のボトムと、『パラダイス』の物語の現在である1970年頃のルーヴィは、ともに崩壊の危機に瀕している。かつての共同体らしい共同体、つまり緊密なつながりと共同意識を持った人びとの集合体は、今となっては人びとの記憶にあるのみだ。このように、ボトムとルーヴィには重なり合う点がある。そこで、人びとの記憶の中の共同体をそれぞれの小説に見ていこう。

### (1) ボトムの場合

『スーラ』の舞台であるボトムは、耕すには不向きなやせた土地で、冬には家畜が寒さにやられて死んでしまうこともあるほどだ。凌ぎやすい谷間の肥沃な土地には白人が住み、黒人はそこに土地を持つことができなかった。しかし、ボトムは冬以外の季節には様々な木々が緑をなし、自然

の美しい所だった。子どもたちは仲間で駆けずり回って遊び、夏には川で泳いだ。また大人の手伝いをして働いた。男たちはなかなか賃労働にありつけず、皆は貧しい生活を送っていたが、人びとは道ばたで集い、時にはバンジョーやハーモニカを奏で、女たちはそれにあわせて踊った。川では魚が捕れた。魚を捕って売るのは、徴兵されて戦争に行き、精神を患って帰ってきた男だった。彼の種々の奇行にもかかわらず、ボトムの人びとは彼の売る魚を買い、彼は町の一員として暮らしていた。スーラの祖母のエヴァは、若くして夫に去られ、乳飲み子を含む3人の子どもをかかえて途方に暮れるが、近所の人びとが助けてくれた。その後エヴァは片足と引き換えに大金を手に入れ(列車に足を轢かせて賠償金を得たという噂もある)、大きな家を建て、よその子どもを数人引き取り、家に住まわせた。エヴァの家にはその他にも様々な人が訪れては語り合っただごした。

ボトムの子どもたちに関して、ネルは次のように回想している。

ほんとに、1921年には美しい男の子が何人もいた！(中略)ほんとに、あの子たちはすてきだった。(中略)彼らは屋根裏の窓からぶら下がり、車のフェンダーの上に乗る、石炭の配達をし、(中略)鋤で耕し、重いものを運び、教会の石段の上にとむろし、学校の運動場でからだを片方に傾けながら走っていた。太陽が彼らを暖め、月光が彼らの背をすべり落ちた。ほんとに、1921年には、この世は美しい少年たちでみちあふれていたものだったのに。<sup>(註3)</sup>

## (2) ルーヴィの場合

『パラダイス』においても似たような情景が人びとの記憶に残っている。

ルーヴィの創始者たちは定住地を定めて間もなく、土地の中央に調理用のオープンを築いた。煉瓦を積み、火口に鉄板の扉をとりつけた。オープンを限られた材料から製作するのは一苦労だった。このオープンは、それ以後長い間共同体の台所かつ集会所であり、人びとの結合の象徴であった。人びとはそこに集い、料理を作り、ゴシップに花を咲かせた。子どもたちがその周辺で遊び、大人は子どもに手伝いをするようにと声をかけた。洗礼式を終えた少女たちはそこで服を乾かし、互いを祝う言葉を交わした。夜には子どもたちがオープンに集まって、大人から字を習った。人びとは助け合っただ働き、その甲斐あって、荒れ地は農地となり牧場となった。町

の行事で少年たちの競馬が行われ、少女たちは飛び跳ねてそれを見物した。

### (3) 共通点と相違点

以上に見たように、ボトムとルーヴィの二つの共同体は、ともに白人の社会から差別され、排除されることで否応なく成立したという経緯を持つ。過酷な条件の土地に隔離され、必然的に人びとは協同しなくてはやっていけなかった。しかし、その悪条件にもかかわらず、共同体は人びとの心にはあたかもパラダイスのような情景として記憶されている。子どもたちは健全に生まれ、人びとは一体感を持って働き、自らのアイデンティティを得ていた。そして民族の伝統が継承されていた。しかし記憶の中の共同体が、人びとにとってどんなに美しく懐かしいものであっても、共同体は時代の流れの中で、変わっていく運命にある。その点でも二つの共同体は共通している。

相違する点は、ルーヴィが町の建設の時代から、自分たちの共同体のあり方を唯一正しいとする、排他的な性格をもつ、強固な共同体であったことだ。ここで自分たちを絶対化する根拠となっているのは、町の創設者たちの体験に関する集団的記憶だ。この集団的に記憶された先祖の歴史物語は、やがてこの町が移り変わろうとする時、それを阻止しようとする力となって働く。それが、いつしか消えていくボトムと、ルーヴィの大きな違いだ。またその違いが、「魔女」との関わりの違いともなって現われる。

ルーヴィの人びとは代々、町の創始者たちの体験を語り継いできた。ルーヴィの指導的立場にある男たちは、歴史物語の中に唯一の美と正義を感じており、現実の町がその理想から離れていくことに危機感を募らせている。この独善性と排他性が、実際に男たちに銃をとらせ、「魔女」退治に駆り立てる。これに対し、ボトムの人びとはスーラを魔女と見なしたものの、排除はしなかった。

### (4) ルーヴィの歴史物語

ルーヴィの人びとの記憶にある歴史物語をさらに詳しく見ていこう。

ミシシッピーとルイジアナに住んでいた元奴隷の黒人たちは、公職に就いていたが、白人たちから職を追われ、新天地を求めて、1890年にオクラホマへとやってきた。9家族と他の者も合わせて総勢150余人が荷物を背負って徒歩で旅して来たのだが、中には妊娠している女たちも、幼い子

どもたちもいた。1か月余りの旅の行く先々で、一同は入植はおろか、町に入ることも拒否され、つらい野宿を続けた。町に近づくなど銃を発砲され、危険な輩呼ばわりされた。こうした屈辱的な体験は彼らに、白人への憎悪と自分たち以外の者への徹底した警戒心を植えつけた。彼らの一体感はいやがうえにも高まり、不屈の精神が培われた。

ある夜ビッグ・パパは息子の一人とともに夜通し星空の下で祈りを捧げた。夜明けに、二人は不思議な足音がとどろくのを聞き、「歩く男」を見る。ビッグ・パパは自分たちが神とともにあることを確信し、一同にそのことを告げた。彼らは自分たちが選ばれた民であるという信念を持つ。「歩く男」はその後も二人の前に姿を現わし、最後に現われた時、ここが「約束の地」であると示すようなしぐさをして消える。一同は大きな感激を持って、その荒れ地に定住することにした。インディアンと交渉し、その土地を手に入れるために、人びとは1日16時間、多いときは20時間も働いた。はじめて女たちにドレスを買ってやることができた時の喜びは、人びとの心をしみじみと満たした。

どんなにつらい労働も、自分たちだけの町を築くことを考えると耐えられた。それは白人の暴力から自らを隔離する唯一の方法だった。例えば女たちは、白人の家に働きに行き、そこで雇い主から強姦される危険に身を曝す必要がなかった。たまによそ者が通りかかり、少女たちをからかうことがあったが、そんなときは町の男たちが集合してよそ者を退散させた。女たちは町の男たちに完全に守られていた。それが男たちの誇りだった。

忍耐・勤勉がルーヴィの人びとの特質であり、純粋な黒人の血が彼らの誇りであり掟であった。

### 3 ルーヴィにおける物語の継承と現在

ルーヴィの歴史物語は、ビッグ・パパの孫で50歳くらいになっているモーガン家の双子の記憶として語られている。この物語は、1970年ころの今でも、町で知らない者はないほど人びとの心に留まっている。それはクリスマス劇に仕立てられ、毎年町の子どもたちによって演じられている。目に見えない共同体の「聖書」というべきものである。しかし、その物語の重視の程度は、人により差がある。

この物語を最も重視しているのはモーガンの双子で、彼らにとっては、

その歴史物語と一体となることが理想の生き方であり、物語の延長線上に町を維持していくことが自分たちの使命だと信じて疑わない。彼らにとっては、黒い肌は善、白い肌は悪である。町には「貧乏白人のように見える女」を妻に迎えた男がいるが、その一家に対し、モーガンの双子は嫌がらせを続けている。また最近の町の若い者たちの伝統軽視の態度に、二人は憤りを感じている。

これに対して、ルーヴィの女たちは、町の歴史を思い、誇りを感じるといふ点において、男たちほどではない。1950年ころにヘイヴンから現在のルーヴィに15家族で移動したが、そのときに男たちは例のオープンを大事そうらうに移送し、再び新しい土地で組み立てた。その作業を女たちは醒めた目で見ている。すでに各戸で調理用のストーブを備えており、もはや共同のオープンは実際上の意味を失っていたからだ。

モーガンの双子の妻たちは、二人とも勤勉で申し分のない主婦であるが、町の伝統を守ろうと意固地になっている夫たちのやり方に、疑問を感じている。夫たちの人生は誇り高いが、その人生の過程で失ってきたものがあると彼女たちは気づいている。確かに町の中での地位が高まり、町一番の金持ちにはなったものの、彼女たちは毎日の生活に満たされないものを感じている。しかし彼女たちは不安や不満を夫たちにつけることができない。ただ夫たちに対して、いくぶん冷ややかな態度をとるだけだ。

若い者たちは、もはや共同体の歴史物語に自己のアイデンティを求めることはしないし、できない。オープンのあたりにたむろして、ゴミを散らしたり、現代流の音楽を鳴らして年長の者のひんしゅくを買う者もいれば、ふしだらな放蕩者もいる。若者たちはまた、よそから赴任してきた若い牧師の指導のもとで、アフリカに自己の精神的ルーツを求めようとしている。彼らは、町を隔絶させることで白人たちから自分たちを守ろうとしてきたこれまでのやり方に対し、白人たちと平等な立場で自分たちの権利を主張しようとしている。若者たちは、時代の流れの中で、新しいものの見方、考え方を求めている。いつまでも町が古い価値観とやり方に執着することは妥当でないと考えている。<sup>(註4)</sup>

そんな若者たちの言動に接するたびに、モーガン家の双子は、先祖の受難と町の誇りを忘れたのかと罵声を浴びせる。若者たちの「墮落」も、妻たちの冷ややかな態度も、彼らは修道院の女たちのせいだと信じている。



#### 4 「魔女」の条件

では、共同体から魔女と見なされた女たちとは、どんな女たちなのだろうか。次に、それを『スーラ』と『パラダイス』に見ていこう。

##### (1) 『スーラ』の場合

スーラは躰も秩序もない雑然とした家に育った。少女時代には目立たなかったスーラの顔のあざは年とともに黒さを増し、人びとを不気味がらせる。スーラの母ハナは家を切り盛りする働き者だったが、町の男の誰とでも性的な関係を持った。この男好きという性癖はスーラに遺伝した。町の女たちは、自分たちの夫を誘惑するハナとスーラに腹を立てる。しかし、ハナは男たちから大事にされたが、スーラは男たちからも嫌われた。というのは、スーラは男たちと一度だけ寝てそのあとで理由もなく男を棄てるからだ。そのことで町の男たちは、そして女たちさえも、自尊心を傷つけられた。スーラはハナと違って、結婚することもなかった。

人びとが数え上げるスーラの、人間にあるまじき行動は、たくさんある。まず、母親のハナは、庭で焚き火をしていて火が燃え移って焼け死ぬのだが、その時スーラは、助けようともせず、傍観していた。また、スーラは親友のネルの夫とも関係を持った。男はその事があった後町を出ていき、ネルの家は母子家庭になってしまった。ネルはスーラの裏切りを嘆き、二人の友情は破綻した。またスーラは年老いた祖母エヴァを、入居者への扱いがひどいと悪評高い老人ホームに入れた。エヴァは、家において困るほどもうろくはしていなかったのにだ。さらにスーラの行動にもなう奇妙な自然現象もあり、町の人びとはスーラを魔女として恐れるようになる。そして何よりも町の人びとの憤激の種となったのは、スーラが白人と寝たという噂だった。

性的な奔放さ、既成の道徳に縛られないスーラの生き方が、町の人びとの脅威となったのだが、スーラにしてみれば、自分はただ何にでも興味を持ち、「自分を作ろう」としただけだ。彼女としては、自分を世間に合わせるのではなく、自分の欲望にすなおに、内面の声に従って生きてただけだ。

## (2)『パラダイス』の修道院の女たちの場合

『パラダイス』に登場するルーヴィの郊外にある修道院は実は修道院ではない。もともとはカトリックの修道女たちがインディアン少女たちを教育する学校兼寄宿舎だったが、今は家や社会からはじき出され、あるいは逃げ出した女たちが暮らしている。その女たちは、次のような者たちだ。

一人は、愛する赤ん坊を過失から死なせてしまった主婦だ。彼女はその事件のあと、夫と年長の子どもたちが赤ん坊を殺し、さらに自分の命を狙っていると思いこみ、家から逃げ出した。彼女は修道院に来てから、食事作りを主に担当する。死んだ赤ん坊が生き返って彼女とともに住んでいるという幻想を抱いている。

次に、男を挑発するような格好をしている少女がいる。彼女の母は行方不明、父は死刑囚で、つきあってきた彼女の恋人も刑務所に入り、一人きりになった。彼女の忘れることのできない心の傷となっているのは、デモに参加した時見かけた、警官隊に撃たれ血を吐いていた黒人の少年の姿だ。ふとしたことで、ルーヴィの町に来て、その気取った歩き方で町の若者の気を惹きつける。修道院で暮らすようになり、その直後から数か月間、町の若者の一人と情事を持つ。彼女はラジオで若者向けの音楽を聴くのが好きだ。前述の赤ん坊を死なせた女とよく言い合いになり、とっくみあいの喧嘩をする。

また、恋人が轢き逃げの罪で刑務所に入り、一人きりになり、あてどなくヒッチハイクをしていた女がいる。彼女は幼い頃、唯一人の身よりである姉（実は母）に置きざりにされたというつらい体験をもっている。20歳になった今も自分の体を傷つける悪癖から抜け出せないでいる。

最後に白人の少女がいる。彼女は自分の母に恋人を取られ、家出し、通りかがりの男たちに集団レイプされた。極度におびえ、言葉を発することさえできない状態で、修道院に来た。彼女は修道院で出産する。

以上4人の女たちは、過去8年の間に修道院にやってきた者たちで、それ以前から住んでいたのは、マザーと呼ばれる今や老衰状態の修道女とコニーと呼ばれる混血の女だ。コニーことコンソラータ（ポルトガル語でコンソラールは「慰める」の意）は9歳の時に、マザーによって外国から連れてこられ、その後修道院に住み続けている。コニーは「煙ったような入日色の肌」と緑色の目、そして紅茶色の髪をしている。彼女は修道女のマザーを慕い、信仰に導かれて生きてきた。コニーは修道院の庭で様々な作

物を育て、他では採れない劇辛のトウガラシを発見し、独特のバーベキューソースを開発し、とびきりおいしいパイを焼いて売り、修道院が自活する道を切り開いた。コニーは39歳の時に町の男に恋をし、情事を重ねた。が、やがて男は寄りつかなくなった。今では60歳くらいになっているコニーは次々にやってくる上述の4人の女たちを受け入れ、住まわせている。

コニーは死人を蘇らせる術を身につけている。ルーヴィの老女ローンがコニーの天賦の才を見抜き、自分はもう老齢のためできなくなったからと、コニーに教えたのだ。

マザーが老齢のため亡くなり、(コニーの術のため無理矢理死はひき伸ばされたが)、コニーは自己喪失状態になる。新しくやってきた4人の女たちは一様にコニーを慕い、それぞれに悩みを語り、夢を語る。そんな彼女たちをコニーはもてあまし気味だ。

そんなとき、コニーのところに見知らぬ男が来る。その不思議な男は神のようでもある。それを契機にコニーは、自分のなすべきことを悟る。やさしかったコニーは、威厳を備えた指導者となる。堂々としたまなざしで皆の前に立つ姿は、若返ったようだ。コニーは女たちに癒しの儀式を指導する。女たちはコニーに従い儀式を経て、心の傷となっているそれぞれの苦しい体験を克服していく。ありのままに、心落ち着いた彼女たちは、剃髪もし、もとの彼女たちではない。

町の男たちは、このような修道院の女たちの事情や変化を、知らないし知ろうともしない。服装の派手さや、女同士の喧嘩、場をわきまえない振る舞いを見て、自堕落な女たちと決めつけている。町一番の名家モーガン一族の唯一の跡取りとなる青年が、修道院の女の一人(上述の気取った歩き方をする女)の虜となって、婚約者を放りっぱなしにしたため、町の将来を憂える男たちは、修道院の存在が町の若者を堕落させているとの思いを強める。また、20年前のコニーの情事の相手だったのは、モーガン家の双子の兄の方だった。彼は人種の純粹さを町の最も重要な基礎として考えていたが、非黒人であるコニーの魅力に惹かれ、関係を持ってしまった。先祖がそして彼自身が最も呪っていた行為、つまり黒人以外の人種との性的交わりに耽溺した。彼はそれを悔い、その過去を女の存在ごと抹消したいと思っている。自分を誘惑し地下室に閉じ込めようとした魔女としてコニーを理解することで、双子の兄は自己を正当化している。双子の弟の方

も、兄の過去を自分たちの共同体の汚点と感じていて、女もろとも消し去りたいと望んでいる。

### (3) スーラと修道院の女たちの共通点と相違点

このように、修道院の女たちは、スーラと同じように、男を誘惑する魔女として見なされている。その「みだらな」魔女の行為の中でも最も許し難いとされる罪は、『スーラ』においても、『パラダイス』においても、異人種間の男女の交わりだ。

そして日々の生活においても修道院の女たちは、女は家で夫に仕え子を育てるものだという、既成の道徳から逸脱している。勝手気ままに振る舞い、着たいものを着て、聞きたい音楽を聴き、ごちゃごちゃした家に住み、世間並み暮らしができない。これらの点で、修道院の女たちはスーラと共通性を持つ。

モリスンの小説にあっては、自分の感性に従って生きる「自由な女」像は、共同体の規範に従順な女との対比で描かれることが多い。<sup>(註5)</sup>「自由な女」と規範を守って自分の感性を抑圧する女が、セットで登場するのだ。『スーラ』では、スーラの親友のネルが、規範の枠内で生きる女として描かれている。また『パラダイス』では修道院の女たちと対照的なのは、モーガンの双子の妻たちだ。

スーラは自分の感性を大切に、共同体の規範に従うことなく、「自分らしさ」を追求した。しかし、スーラは集落の女たちの生き方を「男を自分の手元に縛りつけているだけ」と非難はするものの、自分を創造するという目的を遂げることはできない。祖母の愛を理解せず、老人ホームに追いやり、自らが病に倒れてからも、ネルから差し出された援助の手を拒否し、孤独の中で死んでいく。スーラには、人びととの架け橋を作ろうとする意志が欠落している。<sup>(註6)</sup>世間の規範とは対極的な生き方を示したとはいえ、共同体の中で孤立し、破滅していくしかない。

『パラダイス』の修道院の女たちは、スーラと同じように、社会からはみ出し、魔女と見られているが、最後には宗教的な導きを得て、自己を変革する。そして彼女たちは、ルーヴィの町を変える力を持つことになる。

### (4) 修道院の女たちと町の人びととの関係

修道院はトウガラシなどの農作物を町の人びとに売る他にも、町の人び

とと交流を続けてきた。修道院は、事実上、町の女たちの駆け込み寺の役割を果たしてきた。町の女たちは、様々な苦しみ、悩みをかかえて、町から修道院へと歩いた。例えば、長年にわたる障害児の世話で心身共に消耗しきった女が、雪の中を町から歩いて来た。またある時は、恋人の子を孕みながら、恋人の心変わりに傷つき、お腹の子を始末しようとする少女が来た。その赤ん坊は、修道院の女たちの懸命な看病にもかかわらず、死んだが。さらに、母と壮絶な喧嘩をして、家を飛び出した娘もやってきた。修道院で休むと、町の女たちはいずれも最悪の状態を脱して、それぞれの生活にもどった。ときには男も来た。恋人と別れることを強制され、酒びたりになった男がやってきて、修道院の女たちに介抱された。

そのようなことがあったにもかかわらず、町の有力者の男たちは、修道院の存在に感謝するどころか、修道院と関係したことにより、町の者たちが墮落したと解釈した。男たちの見方とは逆に、修道院に駆け込んだ者たちは、町の伝統に押しつぶされかけた者たちであり、つまり町の強制する規範の犠牲者だというのが真相だといえる。酔いつぶれて訪れた男は、他の町から連れてきた恋人（娼婦だという噂）との結婚を町の有力者から反対され、恋人を追い返されてしまって、それ以来酒びたりになってしまったのだ。母と大喧嘩した娘は、ことごとく自分を枠にはめようとする母に反感を持っていた。その母と娘は、前述の「貧乏白人のように見える女」の娘と孫にあたり、町で唯一白っぽい肌を伝える者たちだ。そのことで町の人びとから冷たい扱いを受けてきた一家の歴史が、母を娘に対して過剰に厳しくした。町の者から後ろ指を差されないようにという母の無意識の強迫観念が、母娘の喧嘩の根にあった。

修道院に駆け込んだことのない町の他の女たちも、勤勉で貞節な主婦でいながら、日々の生活で自分らしい感性を押さえ込まれていると感じていた。例えば、モーガン家の双子の一方の妻は、特に理由もないのに夫のいる家に帰らず、他に所有している家に寝泊まりすることが多かった。そして、たまに通りかかる見知らぬ男（神のようでもある）と話す時、自分が自由になる感じを持つのがだった。女たちは男たちに守られ、同時に抑圧されていたのだ。このような町の女たちは、修道院の女たちに親しみを持っていた。モーガン家の兄の家の息子の一人は、交通事故で死にかけた時、コニーに助けられた。

## 5 「魔女」の消滅以後

さて、「魔女」のいなくなったあとの共同体はどうなったのだろう。

スーラは病死して、白人の業者によって葬られる。町の人びとが何一つ埋葬に手を貸そうとしなかったからだ。「魔女」の消滅で、住民たちの心にかえてゆるみが生じ、生活の緊張感がなくなり、トンネル工事の現場での事故で大勢の犠牲者がでたことは、前に述べた。その後の時代の移り変わりの中で、スーラの町ボトムは崩壊していく。スーラが自分探しの旅の途中で挫折したように、ボトムも崩壊へ向かう。

一方ルーヴィでは、修道院の襲撃を境に、町の男たちに変化が起きる。

修道院に押し入ったモーガンの双子の前にコニーが現われたとき、兄はコニーのまなざしに自分たちには欠けている何かを見いだす。彼は銃を構える弟を制止するように手を上げるが、その瞬間に弟がコニーを撃つ。その時初めて、これまで一体であったモーガンの双子のあいだに亀裂が生じる。町の9人の男たちは確かに修道院の女たちを皆殺しにしたのだが、すぐあとで葬儀屋が来てみると、女たちの死体は跡形もなく消えていた。町の牧師とその婚約者（二人は町を離れていた）が二日後に修道院に駆けつけたとき、死体はなく、人が生活していた形跡も見られなかった。二人は不思議な窓あるいは扉を見る。それはあの世に通じる窓か扉のようでもある。この死体の消失の場面は、『新約聖書』におけるイエスの死の場面を想起させる。

白人を殺したかどで、町の指導者一同が白人の法により逮捕されるだろうと人びとは覚悟する。そうなれば町は破滅だ。しかし死体が消えた以上、通報する必要はなくなった。

修道院の女たちは、襲撃のあとで、それまで離れていたそれぞれの家族の前に出現する。剃髪した頭の毛が少しだけ伸びている姿で。家族の者たちは自分の目を疑いつつも、娘との、あるいは母との短い再会を喜ぶ。女たちは、襲撃で重症を負ったが一命をとりとめ、修道院から逃げ出したのかもしれない。あるいはこの世を超越した者となって、身よりの者のところに現われたのかもしれない。はっきりしていることは、修道院の女たちが、ルーヴィの町の再生の契機になったことだ。

襲撃のあと、町には変化のきざしが現れる。町の人びとは修道院襲撃を

主導したモーガンの双子に対して、公然とではないが批判の目を向け、これまでモーガンの双子が築いていた確固とした地位はゆらぎを見せる。モーガンの兄は、町の若い牧師をけなしてばかりいたが、襲撃のあと、牧師の家まで裸足で歩き、牧師に過去のコニーとの情事を告白する。妻にさえ心を開いたことのない彼が、新参者の牧師に、思い上がっていた自分を懺悔する。他の家の者にも変化が起きる。ある家の争っていた兄弟は和解する。白人の女を妻にしたことで小さくなって生きてきた男は、自信をもって新しい事業を始めようとする。若い牧師は、これまで町の頑固者の男たちに嫌気が差していたのだが、男たちの変化を見て、町に留まる決心をする。

町の創設物語は、これまで町の礎となって町を支えてきたが、異質な者や考えを排除しようとする排他性を生み、ついに隣人を抹殺するという身の破滅へと突き進んだ。しかし殺されたはずの女たちが消えるという奇跡が起き、町は救われ、人びとは再生へと歩みだす。町はその物語の呪縛から解放されたようだ。

## 6 結論——共同体の未来——

黒人たちが築いた共同体は、時代の流れの中で崩壊しかかっていた。先祖が受けた差別を記憶することで、自分たちを守ろうとしてきたルーヴィの人びとは、自分たちのみが正しいとする物語から抜け出していかなければならない。モリスンは、そこにこそ共同体の未来があると語り出しているのだろう。『ピラヴド』(1987年)でアメリカの黒人の奴隷時代の集団的記憶を掘り起こす作業をしたモリスンは、『パラダイス』で共同体の物語からの解放を模索しているといえよう。<sup>(註7)</sup>それは、人種の血の純粹さに価値をおく排他的な考えからの脱却を意味する。モリスンの最新の作品『パラダイス』から受け取れるメッセージは、民族に固有の物語に固執し、排他的独善的になるのではなく、民族の物語を越えていかなければならない、そのことが共同体再生の道につながる、ということだろう。黒人の共同体を描いてきたモリスンの新境地といえる。

「民族の物語からの脱却」というモリスンのメッセージが、『パラダイス』において端的に現われている点を指摘したい。

モリスンの小説では、民族の母のイメージを持つ女が登場し、重要な役

割を担うことが多かった。民族の母のイメージをもつ女とは、逞しい生命力と広い愛を持ち、民族の伝統を継承する女だ。その「民族の母」は『パラダイス』以前はすべて黒人女性だった。それに対して、『パラダイス』に至ってはじめて黒人にあらざる女性コニーが、その役割を担っている。この異国から来た混血女性は、小説中の最重要の人物であり、「民族の母」の種々の特質を持っている。つまりコニーこそ、「民族の物語からの脱却」の象徴である。

コニーは修道院という女の共同体の要になっている。そのコニーは、修道院にやってくる女たちに、また駆け込む町の者たちにも深い愛情を注ぎ、その者たちを癒した。最後には修道院の女たちを導いて自己変革を遂げさせた。そしてコニーは、襲撃のさい、モーガンの兄に向けたまなざしによって、彼の心に変化を起こさせた。このことが町の再生の大きな契機となった。このコニーの持つ広い愛と人を導く力は、これまでのモリスンの小説で「民族の母」に与えられた特徴だ。<sup>(註8)</sup>

また、コニーは死人を蘇生させるという超能力を持っていた。超能力も「民族の母」の特色のひとつだ。『タール・ベイビー』のテレーズは超人的な知覚能力を持ち、ほとんど目が見えないのに、船を操ることができた。<sup>(註9)</sup> また『ソロモンの歌』のパイロットは、薬草の力で男を発情させ、子をもうけさせることができた。『スーラ』のエヴァは、その広い愛と逞しい生き方からして、「民族の母」として描かれていると思われるが、彼女も不思議な知覚能力を備えていて、見たことも聞いたこともない出来事について知っていた。

『パラダイス』には、ローンという黒人の老女が町の住民として登場する。彼女は薬草の知識を持ち、死者を蘇生させる術を知っていて、それをコニーに伝授する。彼女は人の心が読めるとも言われている。しかし、ローンは町の中で重要な役割を果たしてはいない。コニーこそが、広い愛と不思議な力を持ち、人びとを導く「民族の母」だといえる。これまでの「民族の母」たちの様々な力の中でも、際だった力である蘇生術という超能力は、黒人の女ローンから、非黒人のコニーに受け継がれた。「民族の母」の力が、はじめて人種の垣根を越えて、非黒人の女に引き継がれたことは、意味深い。

モリスンの描く「民族の母」は、『パラダイス』のコニーの登場で、もはや特定の民族の母ではなく、人種を越えたより広い意味合いでの母の姿



に変貌を遂げたといえる。このことは、モリスンが民族の物語からの脱却のメッセージをこめて『パラダイス』を書いたという、この小論の主張のひとつの論拠となるだろう。

人びとが共同体の物語への固執を脱し、人種の血の純粹に価値をおく排他主義を乗り越えるとき、人びとにとって、魔女は魔女でなくなるだろう。なぜなら、魔女の最大の罪は、異人種間の性的交わりだったから。つまり、魔女は人びとの心の中にある自己中心的な価値観や道徳が生み出した幻想だったのだ。

今日、世界中で民族間の対立抗争が続いている。また日本に住む私たちの周りでは多くの場合、共同体そのものが崩壊して久しい。トニ・モリスンの小説は、今日の共同体のあり方を考える上で、またとない示唆を私たちに与えてくれる。

#### 注

- (注1) チャールズ・スクラッグズ氏は『黒人文学と見えない都市』（松本昇他訳、彩流社、1997年、251～252頁）において「モリスンの第4作目までの作品においては、市場に駆り立てられた大衆文化の力と魅力により個々人がその土地の文化から孤立し分離することが、自己と他者、男と女、家と近隣、村と大都市の間の葛藤の主な原因であった。」と述べている。
- (注2) Toni Morrison, *Paradise*. New York: Alfred A. Knopf, 1998, p. 3. 大社淑子訳『パラダイス』早川書房、1999年、11頁。
- (注3) Toni Morrison, *Sula*. the Penguin Group, 1982, p. 163-164. 大社淑子訳『スーラ』早川書房、1995年、196～197頁。
- (注4) 「白人たちと平等な立場で自分たちの権利を主張しよう」とする若者たちの傾向は、1960年代の公民権運動の高揚を反映している。
- (注5) 第3作の『ソロモンの歌』（1977年）では、感性豊かな女パイロットと、その義理の姉（我慢の人生を送っている）が対照的に描かれている。モリスンはすでに第1作の『青い眼がほしい』で、自らの感性を抑圧して生きる女を登場させ、その生き方に批判の目を向けていることも、注目される。
- (注6) 吉田廸子氏は『トニ=モリスン』（清水書院、1999年、112頁）において、次のように述べている。「スーラには、エヴァの愛がなかった。（中略）その眼は、（中略）同胞への愛の不在という空洞を抱いて、自己の創造に

失敗したスーラ自身の虚無を映している。」

- (注7) 『ピラウド』に関しては、太田まり子「トニ・モリスンと黒人共同体」(『Contexture』(埼玉工業大学教養紀要)第15号, 1997年, 46~48頁) 参照。
- (注8) 『ピラウド』のベビー・サグスは共同体の黒人を導く導師であった。また、『ソロモンの歌』のパイロットは、主人公のミルクマンを導いて、民族意識に目覚めさせる。
- (注9) テレーズに関しては、太田まり子「トニ・モリスン『タール・ベイビー』の主題をめぐって」(『Contexture』(埼玉工業大学教養紀要)第16号, 1998年, 29~30頁) 参照。

---

## A Study of the Black American Communities in Toni Morrison's Novels, *Sula* and *Paradise*

Mariko Ohta

Black American communities are the main elements in Toni Morrison's novels, *Sula* (1973) and *Paradise* (1998). The two communities in the novels have much in common. Both communities are facing their disruption and have women who are thought to be witches. The relationship between the people and the women have a deep connection with communities' future.

The purpose of this study is to research the similarities and differences between the two communities. Through analyzing this research, I have come to the following conclusion: Morrison thinks that communities must rid themselves of their own historical stories and through these changes, communities will regenerate.